

印象27編 - 2022年1月の総評に代えて

○林 桂○

\* 応募作の急増に伴って、佳作として推した作品も増え、また総評に取り上げた作品も増えた。もともと、総評に取り上げた作品と取り上げざる作品に大きな差はない。総体的に表現が洗練されてきている。そして、選が難しくなっている。ただ、改行のスペースを活用できていない作品や改行ポイントに疑問符がつく作品が時折みられ、もったいないなど思うことがある。投稿前に最後の推敲を。

●郡司和斗●(茨城県)

ハンドルに脚を乗っけて眠ってる  
後輩が連れてきてくれた海

\* 後輩の運転する車で海までのドライブをする。運転に疲れた後輩は、運転席を倒して行儀悪く眠っている。「後輩が連れてきてくれた海」の措辞が巧み。心に沁みている。

●????沢美香●(宮城県)

カイロ振る音のしてくる電話

\* 使い捨てカイロに熱を持たせるために振りながら、電話口の向こうで話してい

るのがわかる。くだけた対応に、思わず笑いを誘われる。あるいは、退屈しはじめた合図か。

●立花ばとん●(東京都)

椿 落ちる  
椿があったところ  
の  
空気

\*改行表記に工夫がみられる。一読、「椿散るああなまぬるき昼の火事」(富澤赤黄男)を想起させる。

●桜咲●(千葉県)

一葉を  
おいかけおいぬき  
犬あそぶ

\*「ひとは」でなく、「いちよう」なのだろう。「おいぬき」とあるのだから、相手は人間、樋口一葉。所用で出かける一葉の足元にじゃれつく仔犬。ある日ある場面の想像だが、思わず一葉の生涯をいとおしいと思わせる世界だ。

●まちりこ●(埼玉県)

あたらしく買った冷蔵庫のひかり  
まぶしい朝の越して来た街

\* 越してきた街での初めての朝。新しく  
買いそろえた冷蔵庫がひかる。白物家電  
とは言うが、その輝きに新しい生活を実  
感する。新生活が輝く。

● さいう ● (愛知県)

わたしたち、  
まりものように着ぶくれて  
渡り廊下をさぶさぶと行く

\* 高校だろう。いまどき、渡り廊下は体育  
館に繋がる学校で見かけるくらいだから  
だ。集会だろうか。寒さ対策で「まりもの  
ように」着ぶくれている。「さぶさぶ」は  
寒い様子であるとともに、歩く様子でも  
あろう。心躍る内容の集会ではなさそう  
だ。

● 夜 ● (東京都)

卒業式帰りの市バスいつもの席

\* 卒業式の帰りも、いつものバスのいつ  
もの席で帰る。しかし、明日から同じよう  
に席につくことはない。卒業の日には感  
傷的な場面がいくつもあるだろうが、何  
でもないこんな場面が一番胸に響く。

● 長谷川柊香 ● (宮城県)

園児一列  
枯芝の

丘に  
たゆむ

\* 緩やかな丘の形を模したカリグラム表記になっている。「たゆむ」の位置が絶妙。園児が丘を越えて憩っている。

●まぢりこ●(埼玉県)  
トラックの荷台まるごと  
薔薇だった  
雨の首都高速の土曜日

\* 現実的に考えれば、薔薇農家、花屋、イベント業者などのトラックとの遭遇だろう。しかし、荷台一杯の薔薇という像の力に圧倒される。「雨」がそれを一層強めている。

●まぢりこ●(埼玉県)  
遮断機が降りる電車が通過する  
まばゆいくらい不機嫌な空

\* 2行目。「まばゆいくらい」は普通は、よいイメージに繋がってゆくものだろうが、ここでは「不機嫌な」。この屈折が1行目を微妙に意味づける。

●さいう●(愛知県)  
低く ひくく  
花は湖面に近付いて

子を成すための器官のはなし

\* 3行目への飛躍に驚かされる。花もまた子を成すための器官に違いないが、もちろん3行目はヒトの器官のはなしだろう。否応なく私達に埋め込まれ、引き受けざるをえない器官だ。

● 燦嗣いとり ● (愛知県)

大人の足跡ばかりの道で  
どこを歩いても沈んでいく靴

\* 子どものころの雪道の経験を思い出した。大人が作った雪穴の歩幅に合わせて歩く大変さ。しかし、ここでは、もっと大きな、生きがたさの意味合いで書かれているのだろう。

● 加藤美紀 ● (愛知県)

口喧嘩中に  
お前の母ちゃんデベソと  
息子に言った夫を  
まだ許していません

\* 子どもの口喧嘩の決まり文句「お前の母ちゃんデベソ」は、子どもの最も大切なものへの攻撃であり、攻撃する者も、される者も、本人よりも「母ちゃん」を攻撃する方が効果的だと思っている点で可愛らしくて笑える。しかし、大人の夫の言葉と

なれば、しかも自分に向けられたものとなれば、どこか邪悪な意図があるやもしれない。許しがたし。同意。

● 広田 土 ● (大阪府)  
犬がどうしても飼いたくて  
ペットショップの仔犬に  
「太郎」と名をつけた

\* 名前の不思議を思う。名づけることは所有に繋がる。犬を所有することができる。社会的な認証の関係は得られなくても、確かに「太郎」は自分の犬なのである。

● さいう ● (愛知県)  
終バスの  
空気はしんと重たくて  
友にメールを返したりする

\* 一日を重い気分で終えようとしている。気散じのためのメール返信が、その気分に見合っている。

● 猫谷圭希 ● (広島県)  
ばあちゃんの足の小指が薬指  
よりも長いと知った病室

\* 看病ではじめて祖母の身体的特徴に気づく。案外身近な家族の身体の特徴に気

づかずにいることはある。看病が気づきの場を与えてくれている。

●小沢旭●(山梨県)

街灯の下から裸木を見る時  
世界は木々の夢だって確信する

\*世界は木々の夢かもしれない。世界の主宰を木々に感じるとる感性の清潔さ。たとえば、世界は神が主宰するという考えは、自身が神を所有したいという裏返しの世界観だろう。木々が主宰する世界にはこの裏返しを感じられない。それが清潔感となっている。

●山本先生●(東京都)

寝て起きて詩を吐いて寝る蝸牛

\*カタツムリの徒然なる生活。起きて寝る、起きて寝る。しかし、その間に「詩を吐いて」いることに気づく者はそうはいない。確かにカタツムリの生活は詩人そのものかもしれない。

●さくらママ♪●(兵庫県)

宇宙一  
じいじが好きというだけで  
このからだすべて  
じいちゃんの形見

\* 自分自身が祖父の形見であると思うことで、祖父と強く繋がり、また自身をいとおしく思える。日本一でも世界一でもない「宇宙一」に、子どもらしいメンタリティが投影されてもいるだろう。

● さいう ● (愛知県)

祈りとは一種の依存  
陽に近い人から  
影が濃くなってゆく

\* 確かに祈りとは究極の依存に違いない。他力本願。2行目、3行目は、どのような関係なのだろう。祈りとは異なる摂理の像のようにではある。

● 桜咲 ● (千葉県)

集団の  
中学生に  
うずもれて  
大丈夫なよな  
そうでないよな

\* 列車の中とか、何かの会場での偶然の遭遇だろう。中学生の集団に紛れてしまった戸惑いが、4行目、5行目で表現されている。確かにこんな感じになるだろう。

● 桜咲 ● (千葉県)

そんなに降らなくても

よかったのに 雪

\* たまにしか雪が降らない地域だろう。雪が降ってきたのを喜んでいたが、喜びの量を越えて降った雪への戸惑いをユーモラスに描く。

● さいう ● (愛知県)  
びい玉をきつく握って  
はじめての  
保育園へと向かうおとうと

\* びい玉は勇気をくれる宝物。

● さいう ● (愛知県)  
わふふ、って  
笑うじいじの側にいて  
春の陽射しにひたすくるぶし

\* 日向ぼっこのようである。3行目で「くるぶし」にイメージが収斂してゆく表現に感服。

● 青野陽 ● (熊本県)  
貝殻が模した波間のさざめき  
ねえ  
海に桜をぶちまけたいね

\* 1行目の貝殻に刻まれた模様を波間を模したというのもさりながら、3行目への

展開の鮮やかさ。あるいは桜貝にヒントを得たのかもしれない。「ちるさくら海あをければ海へちる」(高屋窓秋)を想起させる。

●松下誠一●(東京都)

将来のことは将来決めるので  
黙ってシャケを食べてください

\*求めていないのに、今後の進路に何かとアドバイスをしてくる家族への言葉だろう。少し迷惑です、という思い。2行目が愉快。

●猫谷圭希●(広島県)

泣く為に犬が死なない映画見る  
ポップコーンとジュースを持って

\*愛犬を失った直後なのだろう。犬が死ぬ映画がそんなにあるはずもない。安心してられる。死んだ犬とは無縁の映像にしばし癒やされたいのである。